

驚きの連続 大相撲秋場所観戦雑記
(平成27年九月場所を終えて)

この場所の印象はひとことで言うと「驚きの連続」という表現が相応しかった。思いもかけぬ出来事が続いて起きることが面白さを盛り上げてくれた。

<驚き その1>

驚きの第一番目は初日の千秋楽に始まった。白鵬がこともあろうに隠岐の海に敗れてしまった。立ち合いの瞬間に少々気になったことがあった。通常白鵬は、最初の一步目で右を軸足にして左足は仕切り線付近又はそれを越える位置ぐらいまで大きく踏み出すのだが、この日は踏み込みの距離がやや短かったし腰の位置も高めで腰の構えが常とは異なっていた。この腰を深く沈めた立ち合いの踏み込みが二の矢・三の矢に反映され、前まわしや浅い位置の上手を取ることで前進圧力も相まって功を奏する。この気になった立ち合いは二日目の嘉風戦にも見られ、結果として三日目から休場となった。足腰に何らかの異変があることを感じさせる二日間の立ち合いだった。



平成27年九月場所二日目 (対嘉風戦)



平成27年九月場所初日 (対隠岐の海戦)



平成27年三月場所十二日目 (対琴奨菊戦)

白鵬の立ち合い比較

<立ち合いの一步目の踏み出しとその姿勢>

下：平成27年三月 上：平成27年九月 (今場所)

- ◆初日：一步目の歩幅が狭い
膝の曲がりが少ない → 腰が高い
- ◆二日目：腰が後に残っている
膝の曲がりが少ない → 腰が高い

平成27年9月28日

「隠岐の海の相撲が変わった」「いよいよ隠岐の海はひと皮むけたか」と評した人もいたようだが、私の見解は「隠岐の海は、金星を貰ったって負け越すんじゃないの」だった。見事に予想が的中したので個人的には驚いている。

<驚き その2>

二番目の驚きに「金星を取って負け越しの隠岐の海」を上げたい人もいるかもしれないが、前述のように私はそうは思わなかった。

二番目の驚きは嘉風の活躍。11勝4敗の好成績で、11勝の内7勝は横綱・大関・関脇・小結から勝ち取

ったのだから大いに評価されるべきだろう。大関や関脇が平幕とそれほどの距離を開いてはいないのが現状なので、ひとつひとつの星の中には驚くほどのことでもないと言う人もいるらしいが、きびきびした動作で矢継ぎ早に攻めの手を繰り出して行く相撲は見応えがあった。殊勲賞と技能賞が授与されたが、NHK 解説の北の富士さんが「敢闘賞もやるべきだったんじゃないの」と言っていたが私も全く同意見だった。西前頭筆頭なので、来場所は三役の座に着くことになるだろうが、この人の相撲は「いつも前頭上位にいて欲しい相撲」だ。

<驚き その3>

三番目の驚きは、東前頭 12 枚目まで下がった勢の快進撃。これまで上手取りに拘っていた相撲ががらっと変わって、「差したりまわしを取ったりする以前にまず前進の連続」そして「前進しながらまわしか差し手かを得る」が、この前進の力だけで勝負がついてしまうことが多かった。今場所「相撲は前進圧力が大事」であることを示した何人かの力士の一人だろう。11 日目までを 10 勝 1 敗で突っ走り、終盤で上位と当てられて黒星が増えたが 11 勝 4 敗・敢闘賞は立派なものだ。嘉風とともに来場所が楽しみな力士のひとりである。

<驚き その4>

四番目の驚きは照ノ富士、ここ数場所の動きから見ると白鵬に次ぐポジションを確保した感があり、白鵬なき場所となると優勝はこの人になるのかなと殆どの人が想像したかもしれない。先場所できちんと攻める相撲を身につけたように見えたが、今場所の相撲は受け身になった相撲の中で振り回したり、腰高のままで相手の腕をかかえて強引に寄りまくったりの乱暴な相撲が目立った。おまけに下がりながら技をかける取り口など危険な場面も散見したので、把瑠都の二の舞にならなければ良いが・・・と思って見ていた。案の定、膝を痛める結果となってしまった。大関として、相手に充分に取られても勝てる所を見せたいと言う意識が出てきて墓穴を掘ったのではないかとみているが、真実は本人しかわからない。しかしながら、千秋楽に膝を故障してビッコを引いて土俵に上がったにもかかわらず本割で鶴竜を破って決定戦に持ち込んでしまったのも驚きに値する。しかし、国技館やテレビ機材で見ている人は土俵上の所作を見て明らかな異常を感じただろうから、決定戦も制するのは不可能と見ていたに違いない。

<驚き その5>

五番目の驚きは鶴竜。下馬評にも上がらなかったが着々と自分なりの相撲をとって星を積み上げ、鶴竜らしい不手際による敗戦もありはしたが、いつの間にか優勝戦線の中に残っていた。横綱が二人休場していて、残りのもう一人の横綱が優勝できなかつたら歴史に残る恥になるのは間違いない。しかしながら優勝決定戦で鶴竜ならではの切れ味の良い「美しい出し投げ」で照ノ富士を制したのは見事だった。焦って叩いて墓穴を掘るのではなく、低い立ち合いで前みつを取って、時には頭をつける「鶴竜スタイル」を貫けば良いと思う。

<驚き その6>

最後の驚きは琴奨菊が 11 勝 4 敗の成績を上げたことだが、これを驚きとして取り上げることは大関への侮辱になるはず・・・。北の富士さんが言う「今や平幕が大関に勝っても殊勲の価値がない」という言葉がすべてを語っている。大関が横綱を脅かし、関脇以下を押さえつけるからこそ強い大関や横綱が生まれようというもの。先場所終了時にこんなことを考えた、「大関という特権階級に居るからには琴奨菊も豪栄道も進退伺を出さなくて良いのだろうか？」。

<おまけの驚き>

千秋楽の優勝決定戦が終わった後で、伊勢ヶ浜審判部長の発言

「照ノ富士は優勝同点の星なので来場所は綱取りの場所になると言えるだろう」
おそらく記者がこういう質問をしたからの受け答えだろうとは思いますが・・・。

ところがその翌日北の湖理事長は、

「優勝同点ではあるが 12 勝 3 敗という低レベルの優勝なので綱取りを論議するのは時期尚早」
要職につく者は自らの発言の影響力を考えて発言するようにしてもらいたい。おまけに、規定が不明確なためにいつもこのような不用意な発言による混乱が起きていることを認識しているのだろうか？

以上